

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520628

研究課題名(和文)日本語学習者による助詞「は」の使用における言語転移

研究課題名(英文)L1 influence on the Use of Japanese Topic Marker "wa"

研究代表者

蓮池 いずみ (HASUIKE, Izumi)

関西大学・国際教育センター・留学生別科特任常勤講師

研究者番号：10599020

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語学習者による助詞「は」の使用における母語転移の可能性を探ることを目的とする。母語が主題卓越言語である韓国語、中国語を母語とする学習者と、主語卓越言語である英語を母語とする学習者で助詞「は」の使用/不使用の傾向が異なるかどうか注目し、L1における主題の表し方の違いが助詞「は」の使用に影響を与えている可能性について調査した。その結果、助詞「は」の使用傾向が学習者の母語背景によって異なる可能性が示された。また、本研究とは異なるタスクを用いた予備調査とは一部異なる結果が得られたことから、タスクの種類が母語転移の現れ方に影響を及ぼす可能性が改めて示された。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the possibility of language transfer among Japanese-language learners regarding use of the topic marker "wa". Compared to topic-prominent languages like Japanese, Korean, and Chinese, which follow a topic-comment structure, English is a subject-prominent language that follows a subject-predicate structure. This study investigates how expression of the topic in the L1 may influence the use of the topic marker "wa" in Japanese. As a result, it was found that many of native Japanese and Korean speakers associated "wa" with nouns describing space. In contrast, many native English speakers used "wa" with nouns indicating people, while native Chinese speakers use "wa" with both of nouns indicating space and people. Consequently, it can be surmised that this L1 background influences the particular use of "wa" by non-native speakers. The research also showed that the task types affect non-native speakers' use of wa.

研究分野：第二言語習得

キーワード：助詞「は」 主題卓越言語 主語卓越言語 言語転移 助詞選択ストラテジー 韓国語母語話者 中国語母語話者 英語母語話者

1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマの着想に至ったきっかけは、蓮池(2007)で行った空間表現(格助詞「に」や「で」)の習得研究において、学習者の助詞「は」の使用に興味深い現象が観察されたことである。そこでは、日本語の空間表現の使用における学習者の母語の影響を明らかにすることを目的として、韓国語、中国語、英語を母語とする日本語学習者に対し、絵を見てその中の人物とその場所(及び動作)について日本語で描写する筆記形式のタスクを実施した。母語における空間表現の使用と比較するために、同じタスクを(日本語とは別の被験者に対し)韓国語、中国語、英語で実施し、日本語母語話者によるベースラインデータと併せて分析の対象とした。この調査で得られた最も重要な結果は、学習者に観察された助詞「に」の多用が学習者に特有の「簡略化(simplification)」の一種である可能性が高く、英語の空間表現習得に関する先行研究(Schumann,1986; Jarvis and Odlin,2000など)で示されている「言語転移と簡略化は相互に作用する」という仮説を支持するものとなったということである。しかし、この調査結果では、「に」と「で」の使用以外に興味深い現象が観察された。3つの学習者グループのうち、英語母語話者には「に」と「で」以外の空間表現の使用がほとんど見られなかったのに対し、韓国語母語話者と中国語母語話者の2つのグループにのみ「は」の多用傾向が見られたのである。その原因として考えられるのは、英語が主語卓越言語であるのに対し、韓国語と中国語が主題卓越言語であるという母語背景の違いが影響した可能性である。蓮池(2007)で偶然得られたこの結果は、筆者が「日本語学習者による助詞「は」の使用における言語転移」をテーマとした研究を着想する大きなきっかけとなった。以上が研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、韓国語、中国語、英語を母語とする日本語学習者による助詞「は」の使用における言語転移の可能性を探ることを目的とする。

第二言語としての日本語の習得研究においては、助詞「は」と「が」の習得に関する研究が数多く行われており、これまでに、「は」は「が」より先に習得される、対照の「は」は主題の「は」より難易度が高い、「は」による主題化の頻度は「が」(主格)が最も多いといった傾向があることが明らかになっている(遠山2005)。しかし、これらの先行研究では、「は」の使用におけるL1転移の可能性についてはあまり議論されていない。言語類型論的に、日本語、韓国語、中国語は「主題-解説」(topic-comment)構文を基本とする「主題卓越言語」とされる。主題は通常文頭に位置するが、日本語と韓国語はそれに加え、助詞によって示されるとい

う特徴がある。一方、英語は「主語-述語」(subject-predicate)構文を基本とする「主語卓越言語」に分類される(Li and Thompson 1976)。このようなL1における主題の表し方が学習者の日本語における「は」の使用に影響を与えている可能性も考えられる。したがって、本研究によって「は」の使用に学習者の母語背景が深く関与しているという結果が得られれば、助詞「は」の習得研究において重要な一歩となると考える。

また、「は」の習得を扱った先行研究は、主格の「が」との混同に注目したものがほとんどであるが、「は」の習得の本質を知るためには、「が」以外の様々な格の主題化についても広く分析する必要があると考えられる。したがって、本研究では、空間を示す「に」、「で」格における「は」の使用に関する調査を行い、L1転移の可能性について分析する。

3. 研究の方法

本研究では、調査1で既存のデータを「は」の使用という点から再分析したうえで、調査2で新たなデータを収集し、タスクの違いにより学習者の「は」の使用に変化があるかについて分析を行った。調査1と調査2の具体的な研究方法は下記のとおりである。

(1)調査1:既存のデータによる研究
空間表現の習得を調査した蓮池(2007)のデータを、「は」の使用という観点から再分析した。

被験者

日本語教育機関に通うJSL学習者(韓国語、中国語、英語母語話者)計97名を対象とした。また、ベースラインデータとして日本語母語話者34名にも学習者と同じタスクを実施した。さらに、日本語の使用における母語の影響を分析する際の参考とするため、各言語のL1データも別途収集した(韓国語27名、中国語28名、英語26名)。

調査内容

調査で使用したのは筆記形式のタスクで、絵(町の中に建つビルの各階に住む人々の様子が描かれている)の中の人物についてその場所を含め詳しく描写するというものである。ここでは、多くの被験者が言及していた下記 ~ の対象について、被験者がどのような形式を用いて記述しているかを分析の対象とした。

場所: 建物の2階 人物: 女性2人 動作: 本を読んでいる。

例: 2階では母親が子供に本を読み聞かせている。

場所: 建物の3階 人物: 女性1人 動作: 外を眺めている。

例: 3階では女性が窓から外を眺めている。

場所: 建物の屋上 人物: 男性1人 動作: ギターを弾いている。

例: 屋上では男性がギターを弾いている。

(2)調査2：新たなデータによる研究

被験者

日本語教育機関に通う JSL 学習者(中国語、英語母語話者)及び JFL 学習者(韓国語母語話者)計 176 名(韓国語母語話者 75 名・英語母語話者 40 名・中国語母語話者 51 名)を対象とした。また、ベースラインデータとして日本語母語話者 30 名にも学習者と同じタスクを実施した。

調査内容

助詞「は」の使用に関する下記の3種類の調査を行った(いずれも筆記形式。日本語母語話者にはのみ実施した)。

文完成テスト

絵を見て、提示された語を使用して文を完成するテスト。絵は調査1で使用したものと同じであるが、キーワードを与えることで予め用意した分析対象への回答が確実に得られるようにした。調査1で行ったテストと比べ、産出の自由度が制限されるという特徴もある。

助詞選択テスト

助詞「は」「が」「に」から一つを選ぶ形式。学習者の「は」の過剰使用の傾向の有無を調査する目的で行った。

内省調査

の問題における助詞「は」の使用に関する内省調査(日本語学習者のみ)。の文完成テスト終了後、特に非目標言語的な助詞の使用をした学生に対し、文中に「は」を使用した理由を記入させた(母語による記入も許可した)。

4. 研究成果

(1)調査1の結果

蓮池(2007)のデータを本研究のテーマである「は」の習得という観点から再分析した結果、以下の結果が得られた。

韓国語話者は日本語話者と同様、「は」を空間名詞とともに使用するパターン(例:屋根の上では男の子がギターを弾いています)を最も多く使用していた。韓国語は日本語と同様主題卓越言語で、「は」にほぼ対応する助詞も存在するため、日本語と類似した母語背景がプラスに働いたと推測できる。一方、中国語話者は「は」を空間よりも人物を表す名詞とともに多く使用しており(例:屋根の上で男の子はギターを弾いています)空間と人物の両方に「は」を付加するパターン(例:屋根の上は男の子はギターを弾いています)も見られた。中国語では主題を語順で表し、助詞「は」のような明らかなマーカーはないため、主題の認定が困難であると言われる。このような母語背景の違いが日本語や韓国語とは異なる「は」のパターンにつながっている可能性がある。また、英語話者には空間を表す名詞との使用が極端に少なく、人物を表す名詞との出現と、空間にも人物にも「は」が付加されないパターン(例:

屋根の上で男の子がギターを弾いています)が大半を占めていた。これは主題卓越言語ではなく主語卓越言語である英語の影響である可能性がある。また、英語母語話者に「は」を用いず格助詞「に」や「で」のみの使用が目立った要因としては、空間前置詞(on, in, at)の使用不可欠であることが影響していると分析できる。

さらに、被験者の助詞使用パターンを分析した結果、中国語話者は「人物+は」両方に「は」「空間+は」、英語話者は「人物+は」「は」なし「空間+は」の習得段階を経る可能性が示唆された。

(2)調査2の結果

文完成タスク

被験者が産出した文を、下記のA~Fの6つの型に分けて分析した。

A 「(場所)で/には(人)が(動詞)」型

例:3階では女の子が窓の外を見ています。

B 「(場所)で/に(人)が(動詞)」型

例:3階で女の子が窓の外を見ています。

C 「(場所)で/に(人)は(動詞)」型

例:*3階で女の子は窓の外を見ています。

D 「(場所)で/には(人)は(動詞)」型

例:*3階では女の子は窓の外を見ています。

E 名詞修飾型

例:3階の女の子は窓の外を見ています。

F その他

日本語母語話者は、A型とB型の出現が圧倒的に多く、非文ともいえるC型及びD型の使用は皆無であった。つまり、日本語母語話者は、助詞「は」を場所名詞の後にのみ使用していることがわかる。

しかし、日本語学習者については、母語グループ別に異なる傾向が見られる。韓国語母語話者は、日本語母語話者と同様、A型とB型の使用が大半で、場所名詞の後に「は」を使用している。一方、英語母語話者は、B型が最も多いと言う点では日本語母語話者と韓国語母語話者と共通しているが、次に多いのがC型(例:3階で女の子は窓の外を見ています)であり、「は」を場所ではなく「人物」に使用する例が目立つ。これは調査1と同様の結果である。同様に、中国語母語話者にも、B型と並んでC型の使用が目立つ。しかし、英語母語話者と異なる点は、わずかながらD型(3階では女の子は窓の外を見ています)が出現している点と、E型(3階の女の子は窓の外を見ています)の出現数が比較的多い点である。E型(連体修飾型)が多いのは、母語である中国語の影響であると考えられる。また、「は」を2回使用するD型は、今回もほかの母語話者には見られず、中国語母語話者のみの特徴であった。これは調査1と共通の結果であるが、その出現数は今回のデータでは比較的少ないため、タスクの違いが母語の影響の現れ方に作用した可能性が考えられる。

内省調査

の文完成問題において、英語母語話者及び中国語母語話者は、人物を表す名詞に「は」を使用した被験者が多かった。内省調査でその理由を聞いたところ、下記のような回答が得られた。

- ・主語に「は」を使う。
- ・「は」は強調するときに使う。
- ・新しい主語が登場する時に「は」を使う。
- ・主語について述べている時「は」を使う。
- ・比較や否定的な文の時も「は」を使う
- ・「XはYです」の形だから。
- ・「いる／ある」のときは「が」を使う。
- ・「いる」のときは「が」、動作の時は「は」。
- ・人物を強調／特定したかったから。

これらは英語母語話者と中国語母語話者に共通する回答であった。学習者は学習の初期段階において、「主語＝「は」」という誤った認識から、「は」を主語（特に人物）に付加してしまう傾向があると分析できる。つまり、主語と主題の区別ができていないことによって、「人＋は」の多用が起きていると推測できる。しかし、「は」を空間名詞と人物の2箇所に使用するのには中国語母語話者特有の傾向で、英語母語話者には見られない特徴であった。これは主語卓越言語である英語を母語に持つ学習者にとって、主語（人物）以外の要素（空間）の主題化は不自然なことであり、主題卓越言語である中国語を母語に持つ学習者にとって、主語（人物）以外の要素（空間）の主題化はごく自然なことであるため、その母語背景の違いが「は」の使用に現れたのではないかと推測できる。

助詞選択問題

韓国語母語話者が目標言語的な助詞選択傾向を示したのに対し、英語母語話者と中国語母語話者の助詞選択傾向には次のような特徴があった。

- ・従属節内の主語が「人物」であるとき（例：松本さん（が）家に来たとき、私は家にいませんでした）に「は」を使用する率が高い。
- ・対比的な文や否定文における「は」（例：教室に伊藤さん（は）いますが、田中さんはいません）では「が」とする誤りが多い。

これは、の内省調査でみられた回答「主語には「は」を使う。」「いる／ある」のときは「が」を使う。」が反映された結果であるといえる。主語と主題の区別が曖昧で、「人物」に「は」を使用するというストラテジーが身につけている英語母語話者と中国語母語話者は、助詞選択問題においても同様の傾向を示すことがわかった。

日本語学習者の「は」の使用には、それぞれの母語によって異なる特徴が見られた。母語に日本語の「は」と類似した助詞を持つ韓国語話者には、「は」の目標言語的な使用が見られたのに対し、「は」のような明確な主題マーカータを持たない中国語を母語に持つ

学習者には、「は」の過剰使用とも言える現象が見られた。一方、主語卓越言語である英語を母語に持つ学習者には、「人物＋は」の多用と「空間＋は」の不使用という独特の特徴が見られた。「人物＋は」の多用は中国語母語話者にも観察されており、習得の初期段階に共通の現象である可能性があるが、「空間」における「は」の不使用は英語母語話者のみの特徴である。本研究では、その原因として、母語が主語卓越言語であることほかに、母語において空間前置詞（on, in, at）の使用が不可欠であることが影響していると分析した。

今回、空間を示す「に」、「で」格における「は」の使用において「人物＋は」の多用傾向が観察されたことは、学習者に「主語」と「主題」の混同と同時に、「は」と「格助詞（が、に、で）」との混同が起きていることを示唆するものである。今後日本語教育において、「が格」以外における主題化の習得にも注目した研究及び指導が進むことが期待される。

また、調査2の文完成問題において、調査1のタスク（絵を描写するタスク）と同様の傾向が見られたもの、中国語母語話者による「（場所）で／には（人）は（動詞）」型がほとんど見られなかったことから、タスクの種類（産出の自由度）によって言語転移の現れ方が異なる可能性が示唆されたといえる。

今回、空間を示す「に」、「で」格における「は」の使用において「人物＋は」の多用傾向が観察されたことは、学習者に「主語」と「主題」の混同と同時に、「は」と「格助詞（が、に、で）」との混同が起きていることを示唆するものである。今後日本語教育において、「が格」以外における主題化の習得にも注目した研究及び指導が進むことが期待される。

<引用文献>

遠山千佳(2005)「助詞「は」に関する第二言語習得研究の流れと展望 - 探索的研究と演繹的研究の枠組みから - 」『言語文化と日本語教育』2005年11月増刊特集号:pp.102-121, 日本言語文化学会。

蓮池いずみ(2007)「日本語の空間表現使用に見られる母語の影響について - 韓国語, 中国語, 英語母語話者を対象に - 」『第二言語としての日本語の習得研究』第10号: 68-86, 第二言語習得研究会。

Jarvis, S. & Odlin, T. (2000) Morphological type, spatial reference, and language transfer. *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 535-556.

Li, C.N. & Thompson, S.A. (1976) Subject and Topic: A New Typology of Language. In Charles N. Li ed. *Subject and Topic*, New York: Academic Press.

Schumann, J. (1986). Locative and directional expressions in basilectal speech. *Language*

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

蓮池いずみ、英語母語話者の助詞「は」の使用における母語の影響について - 韓国語・中国語母語話者との比較を通して -、BATJ Journal、査読無、No.16、2015、印刷中

[学会発表](計3件)

蓮池いずみ、英語母語話者の助詞「は」の使用における母語の影響について - 韓国語・中国語母語話者との比較を通して -、英国日本語教育学会(BATJ)年次大会、2014年8月21日、リージェンツ大学、ロンドン(イギリス)

蓮池いずみ、助詞「は」の使用における母語の影響 - 場所格名詞句の主題化に注目して -、日本語教育国際研究大会、2012年8月19日、名古屋大学(愛知県名古屋市)

蓮池いずみ、助詞「は」の使用における母語の影響について 韓国語・中国語・英語母語話者を対象に、中国語話者のための日本語教育研究会中国語話者のための日本語教育研究会第21回研究会、2011年12月17日、名古屋大学(愛知県名古屋市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

蓮池 いずみ (HASUIKE, Izumi)

関西大学・国際教育センター・留学生別科
特任常勤講師

研究者番号：10599020